



市民がつくるまちづくり情報誌

コミュニティくさつ

2010年

春号



ご近所さんの

わ和

輪わ

わWhat?

表紙写真：桜の向こうで春をさがす保育園児（伯母川にて） 大條紘史

何の花かな？



初夏にルビー色の実を付け美味です。
(答は裏表紙)

内容 コンテンツ

- ② 地域で失われつつあるもの
- ③④⑤ 見直してみたい「向こう三軒両隣のおつきあい」
志津地区(青地第二町・追分町)
町内会長インタビュー
- ⑥⑦ 暮らしぶりの変化と地域のつながり
ひとまち政策研究所 仲野優子さん
- ⑦ 新しいまち 新しい暮らし ひとりごと
- ⑧⑨ ゆっくり草津街道物語⑩ 「伝統に触れる 笠縫」
- ⑩ 俳句散歩「春」
- ⑪ 動植物から学んで素敵なヒトになろう
- ⑫ 「渋川・風景の記憶絵」完成披露フォーラム





地域で失われつつあるもの

辻浦 岩水



でも誰でも自分の地域は持っているはず。誰だって自分の地域が魅力的で自慢できるものになってもらいたいはず…。少し本誌には「荷が重いかな」と思いつつも「問題提起ぐらいできるのは?」「読んだ人が自分の地域を見直すきっかけになれば」などとうなづきながら今回のテーマにチャレンジしてみました。

もちろん、「これ!」といった答えがあるものではありません。もしあるとしたら、それはその地域に暮らす私たち一人ひとりの中かもしれません。

まだ春の気配というには少し遠い2月24日、まちづくりセンターの一室では今回の企画を練るための編集会議が。いつものように皆がテーマ設定に頭を悩ませていた時のこと、編集ボランティアの辻浦さんが「ここでいう話かわからないけど…」ポツリと言いだしたのが次のようなお話。

もちろん地域には地域の、家庭には家庭の、そして人には人の事情ってものがあります。考え方も違えば背景だって違う。

地域にはそれぞれ古くからお寺や神社に伝わる伝統行事がある。しかし少子化・核家族化の今、それが簡略化されたり時には引き継がれなくなってきたと感じる。

また「何かもらえるなら参加するが…」「古いことなど面倒だ、止めてしまおう。」「お金がないのに、そんなことわざわざしなくても…」そんな声を耳にする。子どもを取り巻く環境も大きく変わり、塾・クラブと忙しく、時間を見つけては家の中でゲームに熱中しているようだ。

そんな子どもを持つ親たちは「行事に参加しないと近所で何をいわれるかわからないから・・・」と、しぶしぶ顔での参加だ。

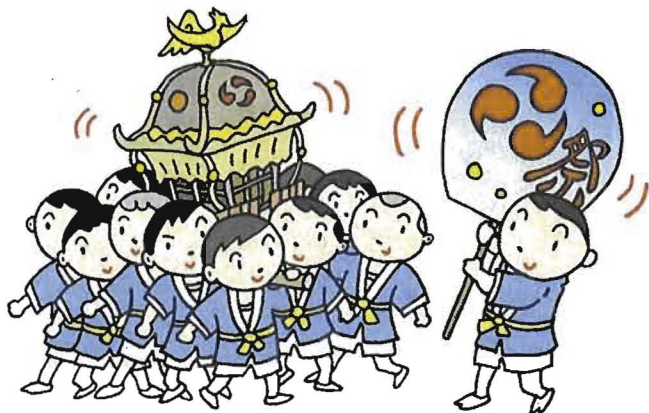
何か大切なことが欠けていないだろうかという考えしてしまう。「高齢者」「働き盛りの壮年」そして「子どもたち」の三世代が枠を超えて和やかに語り合う姿、そんな場が失われつつあるのではないだろうか。今を生きる子どもたちは世代間の交流が少なくなった環境で育ち、成長していることに将来の不安を感じる。

先祖代々住み続ける在所、その自然との調和をとりながら築き上げられた文化や伝統、そこには懸命に生きた先人の知恵と努力が蓄積されている。それらを学び語り合う共通の場となっていたのが、在所の伝統行事である「祭り」や「運動会」ではなかったのだろ

うか。「在所の伝統行事には学校を休校にして参加しよう」とまでは言わなくても、せめてクラブ活動や塾はひと休みするような、統一したルールを提案するのはムチャな話だろうか。

在所の伝統行事に子どもたちが積極的に参加するようになれば、親はもちろん、おじいちゃん・おばあちゃんも孫たちの姿を見に来ることが大いに期待できるのではない

か。もちろん時間はかかるだろうが、このような想いを抱いておられる人々との交流、あるいは同じ想いから何かを実践している人々からその手法を学び機会を持ちたいと願っている一人である。
(辻浦岩水)



見直してみたい

向こう三軒両隣りのおつきあい

ずっと地域を守り続けてきた人、新しく移り住んで来た人もそれぞれに言い分や理由があります。縁あって同じまちに住む人たち…こんなすれ違いをのり超え、共に住民として、まちを愛し育てていくにはどうすればいいのでしょうか。

そんなヒントを探するため、住宅開発が進み新しい住民の方も多い志津地区内で自治会町内会活動を通じて尽力されている奥村金二さん（青地第二町内会長）と小林秀夫さん（追分町内会長）に現状と課題をお聞きします。



志津地区
青地第二町内会 奥村金二さん
追分町内会 小林秀夫さん

知らない人ばかりでは

何も始まらない

町内会の大切な役割は、地域のコミュニティや必要な情報を届けるお手伝いだと思っています。志津地区でも18戸から1600戸の町内会まで戸数も違えば、それぞれに内情だって違うでしょ。情報を届けるのにも適正規模があります。戸数が多いと付き合っただって大変で回覧も遅れてしまうので、数年前から「東・西」や「1組・2組」などに分けて回しています。こうして、日ごろのコミュニケーションをとることで「いざ」という時のための備えをしています。

地区の運動会に行つて知らない人ばかりで驚いたこともあったけれど、ポツポツとでも知っている人がいれば安心できるし地域の問題や普段気づかない良さも共有できるけれど、知らない人ばかりでは何も始まらない。やっぱり、それは昔のような「向こう三軒両隣り」の関係をつくることから始まるんだと思うんです。

町内会費を払つても
…参加しない

志津地区では基本的に全員、町内会に入つてもらうことにしています。たまに役が回ってきたときに退会されることもあるけれどね。住宅が開発されるときは、町内会に入ることを条件にしているし賃貸のアパートやマンションでは家賃の中に町内会費が含まれていて集金される仕組みになっているんです

よ。ゴミ袋や広報もオーナーを通じて住民に配られる。だいたいオーナーも地域の人なので理解してもらっています。

ただ分譲住宅の人たちのなかには町内会行事に参加する人もいますが、出入りが激しいこともあって賃貸アパートやマンションの人は、参加してくれない人が多いのが現実です。町内会加入が入居の条件になっているので町内会費は払うけど関わりは持たない。また、オーナーさんも参加を強要できない。町内会も町内会費をもらっている以上、知らん顔もできずゴミ袋と広報配布、情報を流すだけになってしまう。子どもは子ども会行事には参加しても、町内会行事である文化祭や運動会には参加してくれません。



もう一つ問題なことは、町内会はアパートの戸数はわかっても家族構成までわからないのが実情です。個人情報保護法もあって把握できない。もし、火災や地震が起きて子どもや高齢者がいなくても、それがわからないことが怖いですね。それで2年前に住民の皆さんにご協力いただき、以前のデータを基に町内会員名簿をつくりました。この名簿は、町内会長だけが保管しています。世帯数は常に把握しているが、人口がわかると「65歳以上が何人いる」とか「かなり以前に開発された分譲地は高齢化し、最近開発されたところは、30代の若い家族が多くて世代の開きがある」とか具体的にまちの形が見えてくるんですよ。



小林秀夫さん（追分町内会長）

待つだけでなく仕掛ける

志津地区の65歳以上の高齢化率は市内で9番目。すなわち若い人が多いということになるけれど、祭や運動会の参加状況をみるとどうしても30代半ばから50代半ばまでの中間層がゴソッと抜けてしまう。

運動会をすると私の住む地域に小学生がほとんどいないことに気づきました。ほとんどが60歳以上でそれはもう限界集落のよう（笑）。片や最近できた宅地では小学生以下の子どもがいる家族ばかり。ギャップというか空洞化を感じますね。面白いのは限界集落の我がまちでも、その子ども世代は意外と近くの新興住宅に住んでいたりするんですよ。志津で生まれ育った子どもが家庭をもち、また志津に住んでいるんですよ。

ポイントの子ども。「子どもの参加」が親世代の参加につながります。運動会の種目にオープン参加を設けたり、文化祭も自由に来てもらえるように案内しています。常に情報提供と門戸を開けて待つ姿勢だけでなく、子どもが参加しやすいプログラムをつくる工夫もしています。

また、中学生になると部活動やクラブがあつて地域の行事にも参加しにくくなります。でも町内会から部活動に補助金が出るんですよ。補助金をもらっている以上は志津地区の一員として地域の行事に参加するべきだと思っています。そうしないといけないための補助金かわからない。参加して欲しいから補助金を出すのではなく、参加することが当然なんだと思う。そうしないと地域と子どもがつながらない。



意識してふれあう時代

志津地区でも、昔は冠婚葬祭が一つの親睦の機会となっていた。お葬式は前日の準備から祭壇の片づけまでみんなが手伝ったものです。そんなつながりの中で、どんな家族構成で次に誰が結婚するかわかっていた。今の町内会長は誰がなくなっただか知ることはあつても、お手伝いまではしなくなりました。社会状況や冠婚葬祭の形が変わって「ふれあいと親睦の場」を意識してつくらないといけないとなったということです。だから志津地区では「文化祭と運動会、伯母川の草刈りは必ずやる」と町内会で決めました。これらの行事を通して顔を会わせ親睦をはかることの手段としています。

奥村金二さん（青地第二町内会長）



また追分町内会は、800戸が志津小学校で300戸が志津南小学校に通っている。いわゆる地区と学区がずれているんです。志津地区で行う町内会行事の参加率が悪いのは300戸のほう。もうほとんどが越してきた人で旧家は10軒くらい。志津地区のふれあいまつりに行くと、300戸の方の人に会うことがない。かと言って志津南地区のふれあいまつりに行くわけでもない。環境整備には出ても行事に参加しない。対象者がいたって敬老会やふれあいまつりへの参加者はゼロなんです。

やっぱり、昔からいわれる「向こう三軒両隣

り」の活動からするしかないと思ってます。そんなつながりを、いつかやってつくるのかと考えると結局イベントをすること。子ども会の親子参加に行きつく。やがて子育ても一段落し、地域のことやってみようと思つ人も出てくるかもしれない。小学校のPTA活動や子ども会にフル活動してもらって子育てが終わったころに地域の担い手となってもらうための体制づくりがいちばん重要だと思えます。40代の人に「出て来て」と言っても今まで地域にかかわっていないのに出てくることなんて出来ませんね。

次の次の人を探す

ただ戦後の記憶のある70代の方は、「地域のこともしなくては」という人たちだけ。団塊世代から下の人たちの中に町内会長となって地域を引っ張っていくと思つ人がいるかなと不安も覚えます。誰もが推薦し本人さえ「引き受ける」と言ってくれたらいいだけなんだけれど「なにも自分がなくても」という感じがあるように思える。「頼まれたら仕方がない。やったるわー」というような昔のカキ大将的な考え方が見られない。地域のためになるんだから楽しいことを考えれば誰も文句は言わないのにね。年金受給も伸びて働く期間も長くなって、役員も65歳以上の人にしか頼めない状況です。でも今の65歳なんてまだまだ若いし、それからでも十分に地域を担えると思つています。たとえ周りのスタッフが変わってもそんな人がいてくれれば良いなと思つています。

私の任期もあと一年。次期町内会長候補者も私と同

じような思いを持っていてくれるので大丈夫と思つています。私も氏子総代を受けることになるので相談にのることもできる。私のこの一年間の役目は、次の次の人を探すこと。次の町内会長が相談しながら動きやすい人、しっかりとサポートしてくれる人を探したいと思つている。



結局、町内会長をはじめ三役をどんな人が受けてくれるかが町内を上手くやっていく方法だと考えているし、これを無視したら「協働のまちづくり」はできないと思う。地域福祉であれ防災防犯であれ地域の問題は地域で考えることが当然だけど、現実仕事をしている人が多く、これからのような形で持つていくのが難しい。少なくとも情報を出すことと参加しやすい形をつくることを考えていきたい。今までのように何も話さず、渡さず、いきなり「出てきなさい」とは言いたくない。地道だけど意識的に行事を通じ、ふれあいと親睦を図ること。協働のまちづくりを町内から進めていきたいと考えています。

（茶木修一）

暮らしぶりの変化と地域のつながり

— 知恵と工夫で地域活動を見直す —

ひとまち政策研究所 仲野優子

滋賀県を拠点に地域活性化のため、さまざまな支援や研究、実践を行うNPO法人ひとまち政策研究所の理事および研究員として県内各地の地域コミュニティの調査・研究をしている仲野優子さん（草津市在住）に社会や生活の変化に伴う近ごろの地域のつながりの様子を聞きました。

「近所さんと町内会、そして…」

「近所さん」―それは地域で暮らす私たちの生活の中で自然に存在する身近な関係を象徴する言葉です。その関係は挨拶を交わす程度から互いに支えあつてまで様々ですが、少なくとも顔を合わせる機会がぐらひはしますよね。この「近所さん」の間柄でもわかるように、身近な相手に何らかの形で関わろうとするのは人のもつ根源的な優しさでもあります。

「近所さん」から少し大きくなると「町内会・自治会」があります。これは「みんなの問題をみんなで解決しよう」とするものです。組織的な解決なので、時には子ども会など特定のテーマをもつた他の団体と協力体制をとって効果的に解決しようとすることもあります。こうした組織と組織の関係は地域コミュニティの長い歴史の中から生み出してきた「工夫の賜」でもあるのです。

加えて最近小学校区などさらに大きなエリアを対象に「まちづくり協議会」という自治の形も生まれつつあるのをご存知ですか。県内でも東近江市や湖南市、近江八幡市などでもみられます。

これは町内会・自治会の活動を基本に据えながらも、住民がより活動しやすくするための一つの形と言えはいいのでしょうか。この「活動しやすく」「より協力しやすく」「より情報を得やすく」「より色々な財源を確保し

やすく」などと読み替えると分かりやすいかも知れませんね。

私たちが「より安心して暮らせる」「より多様な形で活動に参加できる」そんな重層的な体制をつくる、つまり自治の新たなセーフティ・ネットといえるものです。

暮らしぶりの変化が生み出す地域の揺らぎ

ではなぜ新たなセーフティ・ネットが必要なのでしょう。その一つに「近所さん」の関係や町内会・自治会の活動などに「揺らぎ」が生まれつつあることが考えられます。この「揺らぎ」とは私たちの暮らしぶりや価値観の変化、経済の変化などがもたらす「時代の産物」ともいえるでしょう。子ども会活動よりも習い事、老人クラブよりも趣味サークル、青年団よりネットコミュニティ、防犯はセキュリティ会社に任せ、仕事が忙しいので役員が回ってくれば町内会を脱会…「揺らぎ」は様々な形で現れます。その一方で福祉・防災・防犯・環境・子育てなど地域が抱える課題はもつ満載。互いの助け合いで乗り切るべきことは増える一方、分権化を進めようとする行政との関係もより複雑になりつつあるのが現実です。

自治会活動であれ、まちづくり協議会であれ、そもそも地域コミュニティ活動の基本はその地域の魅力を引き出したり、つくったりすることにあります。習い事やネットを楽しむように地域の活動も楽しめることができばいいなと思うのです。まちの魅力を知れば誰だって自分のまちが好きになる。自分の趣味やネット技術で得た力をもし自分の地域で活かすことができれば、さらに地域の人たちに感謝されるのなら素敵なことだと思いませんか。きっとその人の関わりは積極的になるはず。暮らしぶりの変

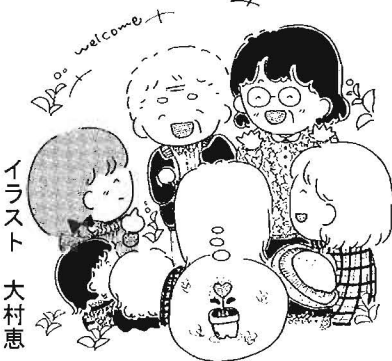


イラスト 大村恵

化を「時代の産物」とあきらめないのでなく、逆手にとれば色々な住民が地域の活動に参画できるチャンスにつながるかも知れません。

揺らぎを見直す4つのヒント

少し気持ちを前向きにしたところで、先ほどの地域コミュニティの「揺らぎ」への見直ししていくヒントを4点ばかり。一つ目は多くの人の手で、それぞれ得意なことを活かしながら楽しく進めていくこと。特に役員さんなんかは楽しくなければ続かないでしょう。

二つ目にそれぞれの仕事を軽減できるような組織づくりをすること。町内会・自治会では事務に係る職員さんをおけなくても、先ほどの「まちづくり協議会」ではそれを専門に行う人を置くことだってあります。役員さんは負担が減る分、事業のあり方について語り合ったり、知恵や工夫を出し合うことに集中できます。

三つ目は「学びの場」をつくること。その状況を知らないみんなが、知恵や汗を出し合うこと、みんなの元気に繋がります。また活動のヒントなんかは案外と他の地域や組織から得ることだってあるものです。

最後は初めての役員さんも安心して活動に取り組めるように、組織体制や他の組織との仕事の役割分担を見直してみる事です。これができるば、さらに進んで行政との関係を見直すことだってできるはずです。

それは将来の自分かもしれない

『はじめて』ということに不安を持ったことはありませんか？「初めて会う人」「初めての土地」「初めての行事」などなど。自分が望む・望まないにかかわらず『はじめて』が突然降って沸いたとき、あなたならどうしますか？

そんなときは心の余裕もありません。ドキドキして声も上手に出ないかも。笑顔も作れず態度もぎこちなくなるかもしれませんよね。

わたしは結婚を機に草津に越して来ました。右も左もわからない土地でまわりに知人もいないところからのスタートです。そんな不安のなかで「最近の若い者は…」「そんなことも知らないの?」「他所から来たんね」「そんなことわかって当たり前」と、慣れた人の何気ないひと言で心がこわばってしまいます。

でも、もし出会った途端に笑顔をもらって「大丈夫!」と励まされ、知らないことを教えてもらうことができたとしたら…。ゆっくり『はじめて』の不安が解けていくと思いませんか?その土地が、その人が好きになっていくきっかけになります。

求めるだけでは物事はうまくいきません。慣れた人も知らない顔をしないでください。教えてあげたり・教えてもらったりしながらお互い歩み寄る。ちょっとした思いやりで、人と人がつながって大きな輪になっていきます。「知らない」ことはいつまでたっても不安です。不安のままでは近寄ることができません。『はじめて』ではない人が「大丈夫!これはね・・・」と声をかけてほしいんです。

『はじめて』の不安が解消されることが、やがて仲間になり地域のつながりとなり、そして生まれる「大きな力」が地域を支えていくことになると思うのです。

自分も含め「近所さん」の暮らしぶりが変化するのは、もはやしかたのないものでしょう。ただそのために、いっそう住みにくくなっている人がまちの中にいるのではないかと思いをめぐらすことは忘れたくないものです。その人は隣りにいるかもしれないし、将来の自分かもしれないですよ。人の持つ根源的な優しさや助け合いのもとに成り立ってきた地域コミュニティの輪。この先5年、10年を見据え、柔軟な知恵や工夫が活かせる場をつくることこそ、今私たちに求められていることかも知れません。(仲野優子)

*ひとまち政策研究所は、「ひと」と「まち」のあり方を問い直す、県域の研究所です。

新しいまち 新しい暮らし

ひとりごと

大村 恵



イラスト 大村恵

(案内) 草津市観光ボランティアガイド協会・(写真) 大條紘史

第10回 伝統に触れる 笠縫

ゆっくり草津 街道物語

庭木の梅やシキミの花を見ながら住宅地を歩くと、道端のツクシやフキノトウに春本番の気配を感じます。「笠の庄」といわれる平井・川原・上笠・下笠は吉備の国の笠氏が居住したといわれ、南笠や栗東の笠川などほかにも笠のつく地名がみられます。第10回となる今回の街道物語では笠縫の道を歩きます。



3本足のカラス 熊野神社

平井を抜けると「アヲキの杜」といわれる自然豊かな場所に現れるのが熊野神社です。市の自然環境保全地区・滋賀県風致保安林にも指定されるこの地は、鎌倉時代に佐々木氏が十二所権現である12体の神を熊野三山から呼び寄せ、まつったところからです。明治の廃仏棄釈により現在は9体が残っており、6体が栗東歴史民俗博物館に、3体が熊野神社に保存されています。



3本足のカラス ヤタガラサ

この神社の神の使いはヤタガラサ。日本サッカー協会のシンボルマークにも用いられている3本足のカラスです。

す。この3本の足は「智・仁・勇」の三つの徳や「天・地・人」を意味するともいわれます。御神木はナギの木で、お守りとしてその葉っぱを財布に入れる人もいるとか。

またこの神社の拝殿は通路を挟んで2つに分かれています。格によって拝礼する位置が分けられているのでしょうか、めずらしい拝殿を一度ご覧あれ。熊野神社にはその昔、坂本に奉公に出た少年に「どこから来た？」と聞くと「あのスギの木あたりから」と熊野神社の大きな杉を指差したという話も残っています。琵琶湖の対岸からも見ることでできたと思われる大きな杉の木は枯れてしまい、今となっては見るのができないのが残念ですね。

宗鑑 春を詠う

さてここから車で笠縫東市民センターまで移動。センター前には「俳諧の祖」といわれる山崎宗鑑の

あさみどり はるたつ空の
にをひかな

の句碑が建っています。志那町で生まれた山崎宗鑑は足利義尚にも仕えた室町時代の連歌師で、尼崎・山

山崎宗鑑の句碑
「俳諧の祖」宗鑑の句碑は市内に4基あります。

- ・笠縫東市民センター（集町）
- ・運海寺（志那町）
- ・常盤市民センター（志那中町）
- ・志那会館（志那町）

宗鑑ゆかりの地として訪ねて来ることもあるとか。この句にふさわしく、このあたりのどかな春の風景が広がり、隣の市民農園では青々と作物が育っている景色が印象的です。

市民センターから川原の交差点に向って歩を進めると奈良時代に創建された天神社があります。境内にあった神護寺の仏像は、これまた廃仏毀釈により飛び地境内である観音堂のなかに移されました。「川原」という地名は以前に葉山川がここを流れていたことからこの名がついたそうです



つくし。春を見つけた。

伝統に触れる 笠縫

難を逃れた最勝寺のツバキ。「草津市の名木」に指定されています（絵：中井徹）



が、天神社の前の道路が川だったとは驚くばかりです。門をくぐると、そびえ立つようなナギの木と境内には神事をする際に使われる大きなかまどがあり、森の静けさに包まれた神社に心安らぎます。

難を逃れた最勝寺のツバキ

天神社に別れを告げ平井方向に川原の交差点を渡ると、赤いツバキの枝が張り出した最勝寺があります。お寺のツバキはクマガイという品種で、拳くらいもあるうかと思うほどの大きな花をたくさんつけます。樹齢350年以上といわれるツバキは京都の宝鏡寺（通称・人形寺）の木を分けたもので、今では見上げるほどの大木です。お寺の前を流れていた葉山川の地下水脈がここまで木を大きくしたとか。

このツバキにもお話があります。以前、人がやっと通れるほどの幅だった最勝寺の前の道、せめて荷車が通れるように、やがて車が通れる幅まで広げようとの計画があたり、そのためこのツバキを切ってしまうという話もちあがりしました。それに対し先代の住職や近所の人たちの「木を切るなんて」と大反対したことから、ツバキは難を逃れました。

こうして残ることになったクマガイのツバキ、私たちの目を楽しませるだけでなく、「草津市の名木」にも指定されました。地域の人々に愛された木なのです。最勝寺10代目の僧、願了はソロバン老僧といわれるほど算学に長け、医学・花道にも通じ、明治天皇の父孝明天皇崩御の際に池坊家元と共にお花を献じました。

最勝寺の向かいには観音堂の入口。観音堂の中には天神社内の守護寺にあった十一面観音がここに移され、今もお守りする10人衆がおられます。ここいらで一休み。淡海くさつ通りと伊佐佐川放水路が交差するところに屋根のあるポケットパークがあります。見上げるとなんと「講踊り」と「アオバナ摘み」のステンドグラス風の天井絵が…。周りの景色だけでなく、たまには上を見上げてくださいね。



上笠天満宮の鳥居

上笠天満宮と笠堂ミステリー

さて伊佐佐川を渡り上笠天満宮へ向かいます。この地を治めていた笠氏は祖神をまつるため神社を建立しました。その後、菅原道真も祭神に加えられたのが上笠天満宮です。境内には道真が愛したことで知られる梅の木と神の使いである牛の石像があります。10月の最終日曜日に五穀豊穰・無病息災・雨乞いなどの意味を込めて奉納される「講踊り」（県無形民俗文化財）は有名です。

ここからすぐのところには西教寺があります。西教寺には薬師如来像が伝わることや境内に古い石造があること、また先ほどの上笠天満宮に「上の堂絵図」が保管されていることから、白鳳時代にあったとされる

「上の笠堂跡」（医王寺跡）は「西教寺から上笠天満宮付近までの広い土地だったのではないか」という説や、「いやいや熊野神社が上の笠堂だったのではないか」という説もあり、ちよつとした古の笠堂ミステリーですね。

忠義を貫いた人 大久保忠隣

突然目の前が開け田畑の向こうに比良の山並みが現れます。畑の一角にあるのは大久保忠隣の石碑です。家康の重臣だった忠隣はいわれなき罪を着せられ、小田原城や土地を召し上げられた上に幽閉の身となりました。上笠の庄屋である井上家で3年の月日を過ごし、彦根に移り住みます。

家康亡き後、彦根の井伊直孝は冤罪を晴らすよう忠隣に勧めましたが「それでは家康公の判断が間違っていたことになる。そんなことをしては亡き殿に申し訳がない」とこれを断ったといえます。その後、大久保家の子孫が井上家にお世話になったお礼にと米5俵を井上家が途絶える昭和15年まで送り続けました。

平成12年には地元の人々の尽力により忠隣が上笠に住んだ証としてこの石碑が建てられました。裏に昭和15年と刻まれているのはこのためです。

GWにある老杉神社のサンヤレは今から楽しみ



老杉神社のサンヤレ

さて最後の訪問地は老杉神社です。神様が大きな杉の木に降りられたことからこの名がついたといわれています。鳥居にまきつく蛇は2月15日の「エトエト祭り」の際に作られ、5月3日のサンヤレ踊りが終わった4日に外されます。今も8つの宮座組織が行事を引き継ぎ神社をお守りしています。市内に7つあるサンヤレ踊りの中でも老杉神社のサンヤレは衣装が美しく、京都の時代祭り（室町時代の行列）はこの衣装を参考にして再現されました。社殿の三間社流造の美しい屋根の形、極彩色のカエルマタの彫刻に目を奪われます。30年ごとに書きかえるという絵皮宣は昨年吹き替えればかりです。

7つのサンヤレ

草津には下笠・矢倉・志那吉田・志那・長束・志那中・片岡の7つのサンヤレ踊りがあり、国選択無形民俗文化財に指定されています。

今回歩いた笠縫の道はあちらこちらに春を見つけることができ、豊かで軽やかな気分にならせてくれました。またサンヤレや講踊りのような伝統行事が今も地域の人々に受け継がれ大切にされていることは誇らしくもありました。鎮守の杜や田畑を通る風が清々しく感じられる春の日でした。（荒川茂美）

春がくると人々は心楽しく野山を歩き、陽気になります。春の訪れを嬉しく思わない人は数少ないと思います。

春と言えば桜が定番ですが、今日は少しおへそを曲げて桜を避けて春の花を詠んだ俳句を覗いて見ましょう。（解説 橋詰辰夫）

俳句散歩「春」

すみれ
董程の 小なき人に 生まれたし

夏目漱石



漱石は「坊ちゃん」、「我輩は猫である」や「草枕」などの小説で有名ですが正岡子規に俳句の指導を受けて、数多くの俳句を詠んでいます。漱石は路傍に咲く堇の花をかみこんで眺め、「智に働けば角が立つ、情に棹差せば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」と思いを巡らせ、

いつそ堇の花くらの小人に成れたらどんなにか楽しいだろう、と現実の世界とメルヘンの世界を行き来していたのでしょうか？

堇の花を眺めながら、「草枕」の構想を練っていたのかも知れません。さすがに大文豪だけに、俳句の中にも「小さな小説」が埋もれています。堇は色と言いい花の姿と言いい気品のある魅力的な春の花です。

何の木の 花とはしらず 匂いかな

松尾芭蕉

春匂う花と言えば、菅原道真が「東風吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」と詠んだ梅の花が思い出されます。春には沈丁花、蟬梅、桃、杏、辛夷等香りのいい花が咲きます。旅の途中で、芭蕉は折からの春の陽気で、気分良く歩いているとき、得も言われぬ花の香りが漂ってきて、思わず立ち止って匂いの主を探したのでしょう。でも、どの木が匂いを放っているのか見届けることは出来ませんでした。いや取って探さなかつたのかも知れませんが、風流に人生をかけた芭蕉さんですから、「何の木かな？何の木かな？」とつばやきながら、旅を続けたのでしょうか。皆さんにとって、春の匂いは何の木の匂いでしょうか？



動植物から学んで
素敵なヒトになろう！

第17回 春なのに・・・
でも、春だから

文・絵 矢原功

3月も半ばになると、路傍にホトケノザの可愛い花を見かけ、タネツケバナの白い花が休耕田を被うように咲く。フキノトウも背を伸ばして花を咲かせている。ソメイヨシノの蕾も膨らみ、花見の季節を待っている。小鳥の声にも春の躍動感が溢れている。

さて、佐渡のトキ保護センターでトキが9羽もやられた。テンの仕業であった。テンは、一度吸血鬼と化すと動く物を手当たり次第に殺す。イタチも同様で、鶏小屋の鶏や池の魚が一晩で全滅させられた例は珍しくない。これらの動物が10センチ四方の隙間があれば侵入するくらいのは素人だって知っている。専門家や管理者が大勢いて、多大の時間と税を費やししながら、何故こんな基本的なことを見過ごしていたのか、私には考えられない。生き物を人為的環境の中で飼う際の最低限の仕事は、その命を守ることである。尊い命を人間の不注意で奪われたのは真に無念であろう。

またまた幼児虐待のあまりにむごいニュースが続いた。わが子の命を守るべき筈の親が、何の抵抗もできない幼児を虐待し、食も与えず死に至らしめるとは、言うべき言葉もない。拳句の果てに「わが子を可愛がる夫に嫉妬した」とか、「二人だけの生活に戻りたかった」とか言う。親が精神的に全く未熟としか言いようがない。

人工飼育で成長したチンパンジーやゴリラは、自分が産んだ子どもの扱いが分からず、パニック状態になってぶら下げたり、放り投げたりすることは聞かすが、これとは次元が違う。

手乗りの文鳥やインコは、まだ巣の中にいる幼鳥を親から引き離し、ヒトが餌を与えて育てるからヒトに馴れて可愛い。しかし、親に育てられた記憶がないのか、子育てをできないものが多い。ところが、親に育てられて巣立ちした鳥をパートナーにすると、子育てする率が圧倒的に高まるものである。



ホトケノザ

サルの世界では、家族ぐるみで子育てをし、先に生まれた子が子育てを手伝いながら成長するので、その間に子育てのワザや他者との付き合い方を覚えていくという。

人間だって兄弟が多かった昔には、そうしたことを自然に学びながら、お互いが助け合って生きてき

た。こうして考えていくと、現在の平和な少子化時代が事件の背景に潜んでいるのかも知れない。しかし、そこは知能の発達した人類のこと。必ず克服できると信じている。

次に魚類の世界。米原辺りの湧水のある清水に、ハリヨという小さな魚がいる。彼らは巣作りをして、オスが稚魚を守る。熱帯魚では、エンゼルフィッシュのように夫婦で稚魚を守るものや、敵が近づくと稚魚を口にふくんで守るものまでいる。

親は子を愛し、子は親を信じ、頼って成長するものである。

クロマグロやタコの輸出入までが国際問題になってきた。

食の大半を輸入に頼る狭い日本、休耕田や放任地で春の野草を楽しむのは邪道だろうか。

下旬になると白モクレンが満開となり、桜も一気に咲き始めた。造幣局の通り抜けの「今年の花」は淡いピンクの八重咲き「都錦」、こちらも楽しみだ。

悩める春の一方、多くの命が生まれる春。ともあれ、美しい日本の春をめでましようよ。

「渋川・風景の記憶絵」完成披露フォーラム

風景の記憶絵（ふるさと絵図）は渋川の人たちの心に息づく沢山の記憶を集約し、日々の生活・祭りや行事・四季の自然の姿などの場面を描き込んだ絵屏風です。

この絵図を仲立ちに、地域の方々が世代から世代へ、人から人へ、とても大切な地域の歴史を受け渡していくこの絵屏風を、渋川のみなさんと一緒に2年の歳月をかけて作成しました。

今回はこの絵屏風の完成を機にお披露目と記念講演を開催します。ぜひお誘い合わせのうえお越しください。

5月9日 (日) 10:00 ~ (開場 9:30)

渋川小学校 (体育館) 無料

☆絵解き講演「ふるさと渋川 風景の記憶」

上田洋平氏 (滋賀県立大学 地域づくり教育研究センター)

☆絵屏風「渋川・風景の記憶絵」完成披露

仲野優子氏 (NPO法人 おうみNPO政策ネットワーク代表理事)

☆その他

問合せ (財) 草津市コミュニティ事業団

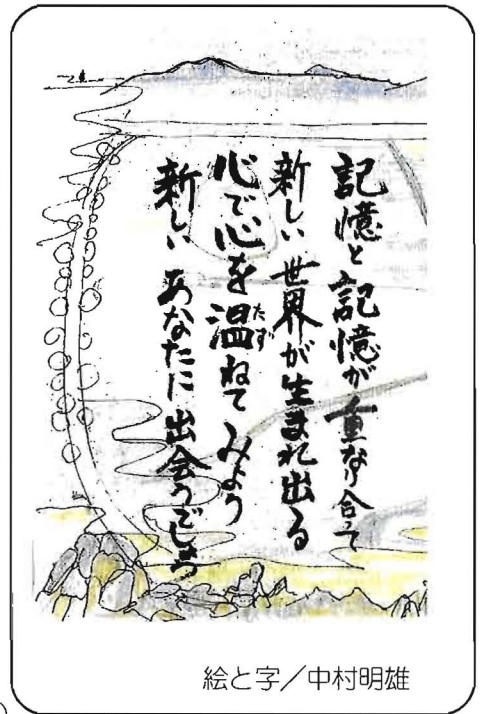
TEL 565-0477 / FAX 562-9340

編集後記

▼冬過ぎて暖 (はる) し来たれば年月は新たなれども人は舊り去く」(万1884) 今日この頃です。

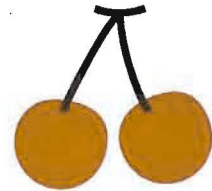
(大條) ▼いわゆる山菜以外でも野山には食べられる植物がたくさんあります。クコ、ヨメナ、ハコベ、タンポポ、ギボウシ (うるい)、イタドリ等、春は幸せです。(橋詰) ▼一昨日は老杉神社のサクラ、今日はサイクリングロード沿いの果樹園でモモ、葉山川の堤を埋めるセイヨウカラシナの群落をスケッチしました。(中井) ▼町内自治会館の庭で桜まつりをしました。地域コミュニティはこうしたイベントでお互いを知るのが原点ですね。

(矢原) ▼久しぶりに旧草津川堤防を散策。ずいぶん風景が変わっていてビックリ! (大村) ▼祭のお雛子、リンゴあめや焼きとうもろこしのお店のにおい、祭の朝のワクワク感など子どもころの思い出があるのは幸せなことだとこの歳になって感じます。(荒川) ▼子どもころの子ども会が楽しかった。特に夏祭りの肝だめし。6年生は下級生を脅かす役なんだけど待つ方が怖かった(茶木)



絵と字 / 中村明雄

「何の花かな？」
こたえ



答：セイヨウミザクラ (いわゆるサクランボ) の花です。サクラと同じバラ科サクラ属に分類されていて、ユスラウメやニワウメに近い仲間です。最近、草津市内や近郊でよく見かけます。草津では花は3月中旬に咲き、6月中旬に実が熟します。

市民編集ボランティア募集!

コミュニティくさつ編集部

(財) 草津市コミュニティ事業団内

〒525-0037

滋賀県草津市西大路町9-6 (まちづくりセンター内)

電話 (077) 565-0477

ファックス (077) 562-9340

メール com-com@mx.biwa.ne.jp

URL <http://www.kusatsu.or.jp/>

community



再生紙使用

~地球にやさしいまちづくり~